

お忙しくても、約 2 分間で読めます

山内公認会計士事務所

ハートフル・ワード (心からの言葉)

TEL 098-868-6895

FAX 098-863-1495

経営者への活きた言葉

小が大に勝つ 2 つの要因 鈴木 喬 (エステー会長)

- 2005 年、私は売り上げ規模が約 200 倍の敵を迎え撃つことになった。世界最大の消費財メーカー、米プロクター・アンド・ギャンプル (P&G) だ。当時、P&G が、我々の主戦場であるエアケア市場に参入するという情報が伝わってきた。私は、すぐに対抗無商品を用意するよう指示した。P&G が参入する 2 週間前に市場に投入し、機先を制することができた。
- 速攻が可能だった要因は 2 つある。一つは、開発済みの技術をすぐに製品化せずに温存していたこと。これが、短期間で市場投入を可能にした。私たちは多数の技術を用意しては、引き出しにしまったきた。そして市場の変化に応じて、いつでも取り出せるようにしている。もう一つの要因は、意思決定の速さだろう。時間は皆、平等に与えられている。その中で、いかに速くことを成し遂げるかが、勝負を分ける。組織が大きいと、トップの指示はいくつもの階層を経て、ようやく現場に伝わる。その間に時間が空費しかねない。
- 一方、当社の規模だと、私の指示が会社の隅々まですぐに伝わり、一枚岩で動ける。現場に出向き、直接命令を出すこともある。大企業を上回るスピード経営は、トップがリーダーシップを発揮しやすい、小さくてシンプルな組織から生まれている。そんなトップ主導のワンマン経営が通用するのは、売り上げ規模で 3000 億円ぐらいの会社までだろう。売り上げが 3000 億円以上に達すると、ワンマン経営者は自分の成功体験に酔って、舞い上がってしまう。そして余計な事業に手を出してコケることが往々にしてある。

(参考:「日経ビジネス」2014 年 12 月 8 日号)

経営者のための社会学

真の豊かさとは何か

中西 輝政 (京都大学名誉教授)

月尾 嘉男 (東京大学名誉教授)

- 大東亜戦争で日本の敗色が濃厚になってきた頃、フランスの駐日大使、ポール・クロードルは友人の詩人ポール・ヴァレリーに、「日本は貧しい、しかし高貴だ。世界でただ一つ、どうしても生き残ってほしい民族を挙げるとしたら、それは日本人だ」と言いました。日本はそういう心の伝統、精神のあり方を太古から継承し続けたからこそ、敗戦から立派に立ち直ったのだと私は思います。(中西輝政)
- いま日本では子供がなかなか増えない要因のアンケートなどで探してみると、生活が大変になるからという理由が第一です。独身であればそれなりに豊かな生活ができるのに、子供ができたら生活の質を落とさなければならぬ。かつて日本では「子は宝」といって、貧しい家でも子供を産んで育てていました。それが豊かさだったのです。(月尾嘉男)

(参考:「致知」: 2015 年 3 月号)

ワンポイント経営アドバイス

製造業は条件のいいところにいく

小林 喜光 (三菱ケミカルホールディングス社長)

- 円安が続けば生産拠点が日本に帰ると見る向きもあるが、そういう幻想は捨てたほうがいいです。自動車工場が戻ってくるとか、石油化学プラントが再び日本に立地するなんてことはありえない。製造業が日本の GDP に占める比率は 2 割まで下がった。製造業はグローバルな競争を戦っていて、最も条件のよいところにどんどん移っていくでしょう。
- ここは政治と企業の立場が違うところです。政治家は国内にある企業本体、つまり単体決算のことしか考えないもの。彼らは国内の票が欲しいのだから仕方がありません。一方経済人は日本でも海外でも、最も条件のいいところで企業活動をやる連結決算の発想に立ちます。どこで儲けるかは関係ない企業と政治家とでベースは絶対に違うし、本質的には意見が合わない。だからこそ、魅力ある国にしないと企業は逃げてしまう、という緊迫感が必要です。

(参考:「週刊東洋経済」2014 年 12 月 27 日・2015 年 1 月 3 日号)

古典に学ぶ

風に乗る術 (その 3)

(解説)「私は老商先生に師事し、伯高氏を兄弟子としてから三年目には、どうやら是非の別に心を使わず、利害を口にしないですむようになった。この時はじめて先生はわたしをひと目見てくれた。七年目には、是非や利害にかかわりなく、自由に考え、自由に話すようになった。先生ははじめてわたしの手を取り、同席することを許してくれた。九年目には、何を考え、何を口にしても、自分の是非や利害ばかりか、他人の是非や利害にもこだわらなくなった」(続く)

(参考:奥平卓・大村益夫訳「老子・列子」: 徳間書店)